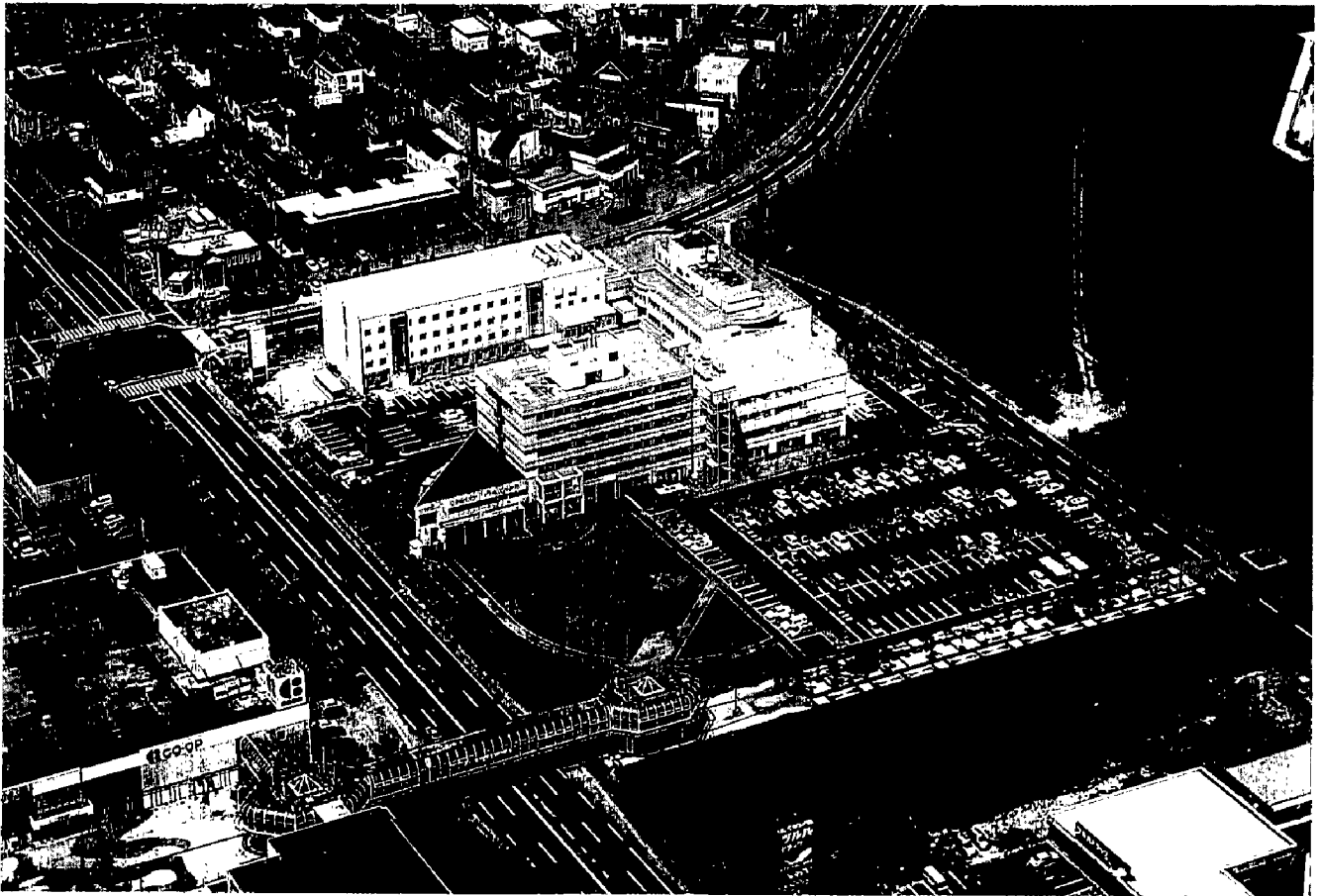


北医療薬会報

発行所 北海道石狩郡当別町金沢1757番地 ☎(0133)23-0301 直通・FAX
北海道医療大学薬学部同窓会 ☎(0133)23-1211 大学代表
発行人 田中稔泰

印刷所 (株)コルパス 札幌市中央区南1条東3-10-1
☎(011)252-6071



平成17年7月に『あいの里の医科歯科クリニック』の増築・改修工事が完了しさらに、「当別の歯学部附属病院」から病棟・手術室を移設し、あらたに『北海道医療大学病院』となりました。

以下のホームページに診療科などが記載されています。

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~hospital/>

目 次

退官教授

「思い出の薬学部」	井出 肇	3
「一大学開設前から一思いつくままに」	町田 實	4
「研究生生活の軌跡一北大から道医療大」	南 勝	5
「大学のおもいで」	森 洋樹	6
「音別一開学のころ」	横澤 菱三	7
第26回 北海道医療大学薬学部同窓会総会		8
医療薬学セミナー報告		10
編集後記		10

「思い出の薬学部」

病態生理学教室 教授

井出 肇



薬学部を退任して一年半になった。現在も「あいの里」で臨床に携わっているが、教室に顔を出すことが少なくなってしまった。後任教授に遠慮しているわけではない。当別キャンパスに足を運ぶチャンスが少なくなったからだ。

当時の羽賀学部長から私が大学院薬学科の教授に推薦を受けた時、私はお断りをしたけれど、結局、押し切られてしまった。私が臨床医を主体に仕事をしている以上、二足の草鞋を履くのは難しいと判断したからだが、院生の教育だけという条件でお受けした。

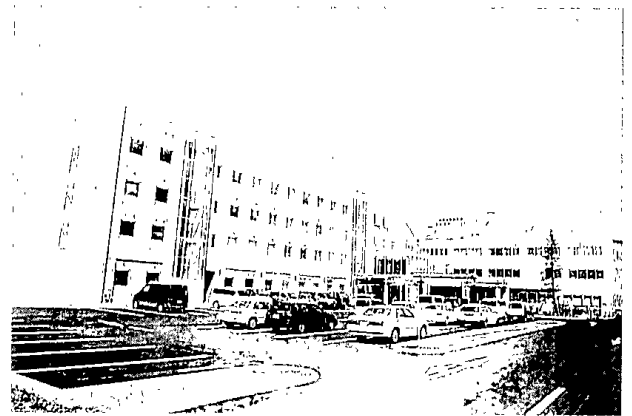
私は薬剤師が臨床に詳しいと思っていた。それが大きな間違いであることを知って、院生に対する使命感が何時の間にか燃えてきた。院生は素直に従ってくれた。それがまた嬉しく、私のエネルギー源になった。教室に配属される学部四年生もみんな素直で可愛かった。

しかし、私は教室に長く座っていることが出来なかった。臨床の現場があるからだ。その様な状態が教室にとってよいとは思えないのは当然であろう。大野助教授が人一倍教育熱心だったので、私は大いに助けられたが、学部の教員全員がすばらしい教育者であり研究者あることを次第に認識するに至った。

私の定年退職後には教育熱心で、研究にもパワーのある人に継いでもらいたいと願うようになったのは、自分の出来なかったことを埋めてもらいたいという思いだ。

私は思う。私は薬学部に所属して幸せだった。私は薬学部にあまり貢献できなかったけれ

ど、私自身には薬学部で学んだ多くがあり、私の人生観が変わった。巣立って行った多くの若い薬剤師が今では同僚となって働いていることを嬉しく思う。どこかに集ってビールを酌み交わしたいものだ。



現在、医師として勤務しているあいの里の北海道医療大学病院

—大学開設前から— 思いつくままに

薬化学教室 教授
町田 實



私が東日本学園大学（現北海道医療大学）と関わりを持つようになったのは、大学設立準備委員の方から教授として大学設立に参画するよう要請された昭和48年のことである。その年の10月には文部省の大学設置関係の現地調査があるために、道東の音別に建設中の教養部校舎に出向いた。この荒涼とした北の地に学生が集まるのだろうか、そんな不安と新しい大学創りへの期待を抱きつつ帰札した記憶がある。大学設立認可後は、専門校舎の設計、研究室、実習室のレイアウトなどに係わった。

昭和50年4月まだ北大在職中であつたが、10月に移行してくる1期生（2学年）の受け入れ準備に執りかかった。当別校舎はまだ完成していなかったもので、北大薬学部合成化学講座の片隅を借り、すでに発令されていた有機系の教員と共に、有機系学生実習の器具の購入リストや実習書の作成を行った。6月末に北大を退職、翌7月1日、東日本学園大学教授に発令され、薬品製造化学講座（平成8年、組織変えにより薬化学講座に変更）を担当することになった。ようやく校舎が完成し、8月1日には薬学部校舎供用式が行われた。

私は、薬品製造化学を主に有機構造分析学、有機化学の講義を担当した。組織変え後、担当教科は有機化学が主になり後に薬学概論が加わった。学生には、まず勉強を通して努力をすることの大切さを身に着けて欲しかった。有機化学は暗記科目ではない。基本原理や事項を考え概念化し、系統的理解に基づいて類推し、問題を解決できるようになって欲しいと願った。それが一貫して、暗記だけでは対応し難い試験問題を出題する結果になった。多くの学生は戸惑いを隠しきれず苦労しながらもよく頑張ってくれたと思う。私にとっても試験問題作成と採

点は大変な時間とストレスのかかる仕事の一つでもあつたが、それは譲れない教育理念に基づくものであつた。それが学生諸君の将来に何らかの力になるであろうことも期待していた。

教授の果たすべき責任として、教育・研究はもちろんであるが、教育・研究のよりよい環境づくりと後継者の育成が肝要であると開学時より心に留めていた。幸い優秀な共同研究者に恵まれ、多くの研究業績を残すことが出来、また着任当時助手であつたお二方が、本学で教授として活躍されているのは大変喜ばしい限りである。

定年が近づくにつれ大学を離れる寂しさ、空しさと、反面、ストレスから解放されるという期待が交錯した。平成16年3月に退職後、非常勤講師として基礎有機化学の講義（1学年、前期）を引き受けたが、平成17年7月、遂に30年にわたる北海道医療大学での教員生活に終止符を打つことになった。今にして思えば、よくも大学の仕事一筋に人生を走り続けゆとりない毎日を送ってきたものと、満足と反省の念に駆られながら、過ぎし日の卒業生の皆様の姿を思い浮かべている。不思議なことに毎日毎日が日曜日である今の生活がとても得した気分させてくれている。現役時代は若い学生諸君からエネルギーをもらっていたのが、今は自宅の狭い庭の土いじりで植物からエネルギーをもらい、ノンビリと日々を送っている。言葉少ない生活が物忘れに拍車をかけているようである。

稿を終るにあたり、色々なことが有りましたが私なりに恙無く勤めを果たすことが出来たことは大変幸せなことと思っております。同窓生の皆様の益々のご発展とご活躍をお祈りいたします。大変永い間お世話になり有難うございました。

— 研究生活の軌跡 — 北大から道医療大

薬理学教室 教授
南 勝



田辺恒義教授主宰の薬理の大学院修了後、検査技師学校教務主任として短大化に参画、他の教務主任を全員教授に推薦し、私が唯一人助教授として申請しているのを知った医学部長が、斎藤秀哉教授の薬理学教室の講師として戻るように勧めた。昭和49年以来、循環器内科でCCUや高血圧外来を担当していたが、斎藤教授と同じフロアーで実験もしていた。昭和56年講師として移り、翌年助教授に昇任した。基礎の助教授ながら北大病院の外来を受け持つことを教授会が許してくれた。薬理学教室に移り富樫広子先生らと種々のカテコールアミン測定法を比較しセロトニン(5-HT)測定につながる成果を得た。ミシガン大学留学から帰国後、病に倒れた田辺教授の後任として東日本学園大学に移った。

昭和61年当時教室は多額の赤字があり、機器類はHPLCが1台のみ。ある企業の研究者に窮状を訴えると「北大には研究依頼にこちらから頭を下げて行きましたが、そちらに移ったなら先生が頭を下げて回ると良いでしょう」との有難い示唆があった。5-HT関係の仕事として嘔吐のモデル動物フェレットを本邦で初めて輸入し、制癌剤誘起性嘔吐に対する研究を始めた。手先の器用な門間芳夫先生、遠藤泰君、測定のプロ浜上尚也君、後に分子生物学のプロ平藤雅彦先生も加わり、現在癌患者に使用されている5-HT₃拮抗薬のほとんどを扱い潤沢な研究費も集まった。多くの院生と学内外の教室からのご協力を得た賜物であった。1頭5万数千円のフェレットを2千頭扱ったので、動物代だけでも1億円以上である。毎年のように国際学会に院

生らと参加し、2つの国際シンポジウムに招請されたのもフェレットのお蔭である。地方の私立大学の為か、国内誌から正當に評価されず、海外の雑誌に投稿を続けたことはスタッフの力を引き出し、学内外に多数の教育研究職を生み出した。

定年後も日本薬学会の6年制用スタンダード教科書出版に島村教授と共に加わり、2つの学会からシンポジストとして招請も受けた。定年後勤めた老健は、福祉施設であるが研究助成金を申請し、学会に積極的に参加している。スタッフのスキルアップの為に、医師の臨床研修をはじめ、多くの医療職専門学校や大学の研修を受け入れている。

定年前4年間、薬学部長職に就き、定員増、編入試験などを実施した。46の国公立薬科大学の中で新卒薬剤師国家試験合格率ベストテナーを8年間続け1位が2回の成績を収めた薬学部をいつも誇りに思っている。

「大学のおもいで」

免疫微生物学教室 教授
森 洋 樹



私が東日本学園大学を初めて訪ねたのは、1976年11月でした。当時、教養部は音別町にあり、当別町には薬学部の建物だけがありました。私は翌年1月、微生物薬品化学講座所属で赴任しました。初めての仕事は、1年半ばかりの微生物学の実習でした。当時は、札幌から大学までの国道275は、道路標識等の整備も充分ではなく、吹雪が多い1月の通勤が容易ではなかったことを思い出します。以来、27年間、大学で教育と研究を続けることとなりました。講義では微生物学、免疫学、生化学などを担当しました。学生は4年生になると講座配属になりますが、初期の頃は学生とよくスポーツなどをやって楽しんでいました。学部学生職員で野球のチームをつくり、北大薬学部の職員学生達と大学の近くのグラウンドで野球の試合をやったこと、また狭い我が家で両方の学生達と大いにもりあがったりしたことなどを思い出します。講座の学生とは、ニセコへ1-2泊のスキー旅行、海水浴に出かけたこともありました。しかし、卒業年次が後になると、次第にカリキュラムに時間的余裕がなくなり、学外での学生との交流が難しくなりました。

学部では病院実習、学生の就職などを担当しました。病院実習では、本学薬学部と北海道薬科大学、北海道病院薬剤師会による病院実習機構設置に立ち会うことができました。これは、全国的な薬学病院実習組織化のさきがけとなりました。退職前の6年間は、本学医科歯科クリニック薬剤部長として薬剤師の実際の仕事を近くで見て、勉強させて貰いました。医療の場で薬剤師が求められる知識は巾広く、深くなっていきます。常に勉強を続けることが必要ですが、学生時代の基礎学力がそれらの基盤になると思います。1978年の第1期生卒業以来、多くの同窓会会員の皆さんが各方面で活躍されていることは心強いかぎりですが、皆さんが誇りを持って、専門家として更に、成長

を続けられることを期待しています。

私が小学校に入学したのは、1945年4月でした。戦争末期で、小学校は軍事物資の保管に使われて、夏休みまでは3日に1日が休日でしたが、8月15日、終戦となりました。戦争が終わって空襲警報、爆撃を避けるための夜の消灯がなくなり、子供心にも緊張感から解放されてほっとしたものです。食糧難から始まった戦後の日本社会は、困難もありましたが、変化が大きく興味深い年月でした。戦後60年間、日本は民主政治の元であり、日本の歴史上でもまれに見る戦争のない平和な年月でした。悲惨な戦争のない時代がこれからも続くことを願っています。

北海道医療大学薬学部同窓会会員の皆さんが健康に恵まれ、それぞれの場で活躍されますことを楽しみにしています。

音別 ― 開学のころ

人間基礎科学教室 教授
横 澤 菱 三



同窓会の皆さん、お元気ですか。私は2005年3月に定年退職しました。北海道医療大学の開学から30年間の勤めでした。学生あつての大学で、生活が支えられていたというばかりではなく、いかに多くのことを学生から教えられたかを思うと感謝に耐えません。

開学から10年間は主要な教養教育が音別キャンパスで1年半（後に1年）行われた後、当別キャンパスに移行して専門教育が行われていました。今や卒業生の半分以上の方は音別という地、また、そこでの学生生活をご存知ないこととなります。そこで薬学部しかなかった時代の音別のことを少し書いてみようと思います。音別での生活を経験された方は当時の様々を思い起して下さい。

音別キャンパスは根室本線の音別駅と白糠駅の間（音別に4km、白糠に11km）の原野の真只中に位置していました。鉄道の線路から数十mには太平洋岸が、反対側250m程には国道38号線がそれぞれ平行した感じで走っています。国道と線路の間の国道に近い所に女子寮と男子寮が、それに続いてより線路に近い所に数軒の教員住宅が建てられていました。国道を跨ぐと校舎やグラウンドなどの大学の施設です。海と原野とに囲まれた、若者にとっては陸の孤島とも言えなくもない場所で様々に展開される若さを教員達はつぶさに見ることとなりました。

整備もまだ不十分な施設でクラブ活動に熱中するもの。海岸で語らうもの。荒れた海でサーフィンをするもの。禁酒の寮内でもかなりハードな生活が繰広げられていたようです。土、日曜日の夜には白糠（飲屋が結構ありました）まで大学のバスが運行され、いつも満員でした。特に帰りの終バスは酒の匂も混じって大変なものでした。クラスコンパが教員の家で行われることも多く、我家の幼かった子供達は学生諸君にずいぶん可愛がっていただきました。

教員もほとんどが20、30代と若く、野球、サッカー、バスケット、バレーボールなど教員チームを作り、結構むきになって学生のチームと試合をしました。特に女子のクラブにとっては丁度よい練習相手だったようです。

このような環境になじめず辛い思いで過した学生もあり、ほんとうに気の毒でした。

―昨年この地を訪れる機会がありました。校舎の一部は何かに使われているようでしたが、グラウンドにはヤチボウスが立ちはじめしており“兵どもが夢の跡”という感にうたれた次第です。

第26回 北海道医療大学薬学部同窓会総会

平成17年5月28日(土)北海道医療大学サテライトキャンパスに於いて第26回総会が開催されました。以下にその内容をご報告致します。会員の皆様には一層のご理解をいただき、同窓会活動にご協力いただきたくお願い申し上げます。

平成16年度事業報告

平成16年4月1日から平成17年3月31日まで

主な事業内容について

1. 理事会の開催

第1回(4月17日)於、サテライトキャンパス

《審議内容》

- 1) 総会開催準備
- 2) 活動予定、方針について
- 3) その他

第2回(1月15日)於、ホテルKKR札幌

《審議内容》

- 1) 支部長会議からの継続審議事項について
- 2) 医療薬学セミナーについて
- 3) 名簿発刊について
- 4) その他

2. 第25回北医療薬総会の開催(5月29日)

出席者39名於、サテライトキャンパス

3. 講演会の開催

1) 医療薬学セミナー(各支部と協力)

5月29日札幌(札幌支部)

6月12日水戸(茨城支部)

9月25日栃木(栃木支部)

10月10日富山(北越支部)

11月6日釧路(釧路支部)

11月13日那覇(沖縄支部)

11月13日旭川(旭川支部)

11月20日横浜(神奈川県支部)

3月19日名古屋(東海関西支部)

2) 第16回医療薬学公開講座

札幌9月18日於、タケダ札幌ビル

3) 第3回薬剤師リフレッシュスクール

7月3日、10日、24日、30日於、サテライトキャンパス

4. 役員会の開催(8月5日)

5. 支部長会議の開催(9月19日)

於、札幌ガーデンパレス

6. 本学他同窓会との懇談会(12月18日)

7. 卒業生への入会案内説明会(1月25日)

入会案内発送(2月16日)

8. 卒業祝賀会(3月18日)

訃報

中毒代謝学教室 阪田正勝 教授

平成16年3月30日

謹んでご冥福をお祈りいたします。

平成17年度事業計画

平成17年4月1日から平成18年3月31日まで

主な事業計画

1. 理事会の開催(第1回：4月16日、随時開催)
《審議内容》
 - 1) 総会開催準備
 - 2) 支部長会議開催準備
 - 3) その他
2. 第26回北医療薬総会の開催(5月28日)
於、サテライトキャンパス
3. 講演会の開催
 - 1) 医療薬学セミナー(各支部と協力)
(※：パンフレット未掲載)
 - 5月28日札幌(札幌支部)
 - 6月18日水戸(茨城支部)
 - 7月9日滝川(道北支部)※
 - 7月30日青森(青森支部)※
 - 10月8日宇都宮(栃木支部)
 - 11月12日那覇(沖縄支部)
 - 11月19日横浜(神奈川県支部)
 - その他未定
 - 2) 第17回医療薬学公開講座
於、サテライトキャンパス
札幌7月30日
 - 3) 第4回薬剤師リフレッシュスクールへの後援
於、サテライトキャンパス
6月11日、25日、7月9日、16日
4. 役員会の開催(随時開催)
5. 会報の発行(9月予定)
6. 本学他同窓会との懇談会
7. 卒業生への入会案内説明会(1月下旬)
入会案内発送(2月中旬)
8. 卒業生名簿発行(12月予定)

北医療薬本部役員(平成17年5月～平成19年5月)

役職	氏名	卒期	役職	氏名	卒期
会長	田中 稔泰	3期	理事	富樫真実子	14期
副会長	山崎 信彦	2期		飛山 毅	15期
	遠藤 泰	4期		木村 真一	15期
理事	多田 正人	4期		高村 茂生	16期(新)
	福田 修司	5期		小名木 仁	17期
	浜上 尚也	9期		木村 治	17期(変)
	星野 太郎	1期		西嶋 剣一	20期(新)
	嶋 唯男	6期	監査	寺戸 睦子	16期(変)
	桂 正俊	12期		久保 亘	21期(新)
	村井 毅	13期			

広島での同窓会

同窓会長 田中稔泰

平成17年10月9日、10日、第38回日本薬剤師会学術大会が広島市で開催され、それに合わせた形で9日にリーガロイヤル広島で同窓会懇親会を開催しました。本大会では全国から卒業生が集まる大会であることから、毎年何校かの同窓会が開催されており、本同窓会としても大会での懇親会が望まれていたところです。



広島は、同窓会支部がまだ設立されていない地域であり開催はなかなか難しいのではないかと考えられていましたが、地元で活躍されている勝原聡さん（3期）、藤原一雄さん（4期）らが中心となり、懇親会を開催することができました。本部の準備不足もあり急なお願いで開催し、参加人数も危ぶまれましたが、29名もの卒業生に集まって頂き、無事開催することができ、大変有意義な会となりました。



懇親会は各円卓テーブルに分かれて座る形となり、卒業以来、初めて会う人や久々に会う人達で始めは静かに会話されておりましたが、次第に昔話や今の仕事の話などに花が咲き、参加者個別のスピーチでも大いに盛り上がり、笑い笑顔が絶えない会となりました。終宴近くには、衆議院議員 藤井基之先生も挨拶に来られ、一緒に写真を撮って頂くなど楽しい時が一瞬のうちに過ぎてしまったような感じでした。懇親会終了後は、同期生や友達同士で2次会や3次会に行かれ、楽しい時を過ごされたことと思いますし、その

ようなお話も伺っております。後日、感謝や感動のメールを頂くなど、参加して下さった方々が、会を盛り立てて頂いたことに感銘を受け感謝しております。

平成18年度の日本薬剤師会学術大会は福井で開催されます。地元北陸支部の杉本支部長のご協力によりまして、現在開催に向けて準備しているところであります。詳しい日時が決まりましたら大会や同窓会のホームページに掲載しますので、大会に参加される方や近郊の同窓生の皆様方におかれましては、是非参加していただけますようお願い申し上げます。



平成17年5月28日(土)、サテライトキャンパス(札幌市中央区北4条西6丁目 毎日札幌会館ビル6F)にて薬学部同窓会総会、講演会(医療薬学セミナー)および懇親会が開催されました。

講演会は本学製剤学教室教授の関川 彬先生をお招きし、『薬剤師の職能』～6年制薬学教育の先にあるもの～と題し、講演をいただきました。



編集後記

今年の当別は雪が多く大変でしたが、ようやく寒さも緩み三寒四温で春の訪れを待ち望んでいるところです。会員の皆様におかれましては御健勝のことと思います。

同窓会会報の前編集委員から編集委員を引き継いでからあつという間に1年以上がたっしてしまいました。

気が付くと昨年は会報の発行がなく、月日の流れの早さを感じるとともに、大慌てで発行に向け取り組み始めました。しかしながら、いざ、始めてみると、なにかから手をつけていいものやら、なかなか作業がすすまず、他の先生に多大なる御迷惑を

掛ながらなんとか発行にこぎつけました。その間、本学では本会報でも寄稿をよせていただいた先生方を始め、諸先生方が退任、転出などにより本学を去られ、新たな先生も加わり、教員の顔ぶれも変わりました。新任の先生には次回の会報に寄稿などをお願いしたく思っています。また、訃報でお知らせしましたとおり、平成16年3月30日、本学中毒代謝学教室の阪田正勝教授が御逝去されました。長年にわたり、研究、教育、本学の発展に御尽力を尽くされた阪田先生の逝去は残念でなりません。慎んで御冥福をお祈りいたします。